

類書と詩

——聞一多の初唐文学論（一）——

牧角 悦子

一 聞一多『唐詩雜論』

『聞一多全集』卷三に収められる『唐詩雜論』は、聞一多の唐詩に関する論考を集めたものである。その中には、生前に発表された論考九篇が収められている。九篇のタイトルは以下の通りである。

- 一、 類書と詩
- 二、 宮体詩の自贖
- 三、 四傑
- 四、 孟浩然
- 五、 賈島
- 六、 少陵先生年譜会箋
- 七、 岑嘉州繫年考証

八、杜甫

九、英訳李太白詩

この中で最も学術的評価が高いのが六『少陵先生年譜会箋』であることは言を待たない。聞一多を知る者の多くが、この一書を契機とすることからもそれは分る。一九三〇年、聞一多三十歳の壮年にあつて、その詩人から学者への転身後初めての業績として発表されたこの詳細で緻密な杜甫の伝記資料は、杜甫研究の基本資料としての価値をいまだに失わない。

七『岑嘉州繫年考証』は、『少陵先生年譜会箋』と同類の、やはり優れた伝記資料であり、八「杜甫」は『少陵先生年譜会箋』の前段階で書かれた抒情的伝記作品である。⁽¹⁾ 九の「英訳李太白詩」が多少異質なのを除いて、六く九の四篇が唐代詩人の閲歴を中心に据えた研究成果であるのに対して、一く五の五篇、特にはじめの三篇は、それらとは違った意図の下に書かれたものであると考えられる。それは「初唐」と言う時代に焦点を当てた文学論であり、また文学の流れ、詩の歴史を大局的視点から明らかにしようとする「詩史」の目論見の一環として捉えられるものである。

本論では、その中の一篇「類書と詩」をとりあげ、聞一多が初唐という時代を文学史、とりわけ「詩史」の中でどのように位置づけようとしていたのかを考察してみたい。

「類書と詩」は、六朝の余風のまだ残る初唐の時期に、北朝の流れを汲む唐王朝の王室とその側近によって新しく開拓されんとした文学の園が、いかなる文学性を追求しようとしたのかを、「類書」の編纂を手がかりとして探ったものである。以下、その全文を訳出する。見出し項目は、全体の理解のために訳者が加えたものである。

二 唐初五十年の文学の特性

検討の範囲は、唐代開国後のおよそ五十年、高祖の受禪（六一八）から始まり、高宗・武后が政權を受け継いだ年（六六〇）までである。この五十年の末尾近くに、上官儀が誅に伏したことは、「江左の余風」⁽²⁾の強制的な収束を意味する。と同時に、それは新時代の先駆である四傑及び杜審言が、創作の道を歩みだした年であり、沈佺期・宋之問と陳子昂もまた前後して生まれた。唐代文学は、ここに初めて六朝のペールを取り払い、自家の面目を現わしたのである。だから、我々が語ろうとするこの五十年は、唐の頭というよりは、六朝の尻尾だと言った方がよい。

通常我々は六朝というと、その文学にばかり気を配り、その時期が学術に対して更に濃厚な興味を持ったことを知らない。唐の初めの五十年が六朝に似ているのも、まさにこの一点においてである。この時期がもしも文学史上に何かの位置を占めるとすれば、それはその文学そのものにどれほどの価値があったかに拠るのではなく、それが文学の研究において特に熱心であったことに拠る。一方で、文学を学術として研究したと同時に、またある意味、文学に偏向した観点でその他の学術を研究したのである。前者についての例を挙げるとすれば、それは曹憲・李善らの「文選学」であり（二二〇において文学の研究はまさに学術の中で正式に一席を占めたのである）、後者の例は、歴史学を挙げるのが良いであろう。彼らがある種特別の文学観念（『文選』が代表する文学概念）を持っていたせいであろうか、唐初の人々の『漢書』に対する愛好は、『史記』に対するそれをはるかに凌ぐ。『漢書』を研究する場合、彼らの対象である『漢書』は、ただの歴史としてではなく、歴史を記載した文学としてあっ

た。李善について言えば彼は『文選』に注をし、そして『漢書弁惑』をも撰した。『文選』と『漢書』とは李善の目からすれば、おそらく全く同じ性質であり、同じような効用を持つ物であり、ともに文学者たちを駆り立てる材料を提供するものであった。彼のこの態度は、その時代全体を代表することができる。このような現象は、歴史書編纂においても例外ではなかった。ただ姚思廉のみを除いたその他の当時の歴史書編纂者たち——とりわけ『晋書』の著者——は、歴史書を記す機会を借りて彼らの文学的才能を売り出そうとしない者はいなかった。音韻学と文学の結びつきが更に顕著になったことは言うまでもない。

ここでは唐初五〇年の文学の特性について述べられる。まずそれが六朝の影響を強く残していた時代であること、中でも六朝における學術の隆盛を、唐初はそのまま受け継ぎ、「文学の研究」に熱心な時代として捉えられることを指摘する。それは言い換えると「文学を學術として研究した」時代であり、また「文学に偏向した観点でその他の學術を研究した」時代であった。文選学と歴史学とがそれぞれの代表として挙げられている。いわゆる文選学は、文選を対象とする学問を言うが、それが音や訓詁に始まり、語彙や典故の追求にわたる総合的、かつ客観的な「學術」であったこと、そしてまた曹憲・李善を始とする江南の学統をもつ息の長い学問体系であったことの意味を、聞一多はここで初唐という時代のもった學術への強い関心という視点から導き出す。

唐初の學術重視の傾向は、文学の學術研究、學術の文学化という二つの性格を生んだ他、更にもう一つの産物をもたらす。それが次に述べる類書の編纂である。

三 類書の編纂

当時の著作物の中に、もう一つ第三の性格と呼んでよいものが存在する。それが類書である。類書は完全な文学とも、また完全な学術とも言えないが、この二者の間に介在する代物である。或いはこの二者を兼ね備えた混合体とも言える。このような奇形の産物は、唐初のあの、まるで文学のような学術と、まるで学術のような文学を最もよく代表するに足る。だから、もしも我々が唐初十年の文学を明らかにしたければ、文学と類書とを一緒に並べて検討するのが最も良い方法である。

現存する類書、例えば『北堂書鈔』と『藝文類聚』などは、当時作られたこの類の作品の中では、ほんの極小部分を占めるに過ぎなかった。この他に、太宗の時に編纂されたものとして一千巻の『文思博要』、後に龍朔から開元の間にはまた、官修のものとして『皇璧』六百三十巻、『瑤山玉彩』五百巻、『三教珠英』千三百巻、『増廣皇覽』及び『文思博要』、『芳樹要覽』三百巻、『事類』一百三十巻、『初学記』三十巻、『文府』二十巻、私撰のものとして『碧玉芳林』四百五十巻、『玉藻瓊林』一百巻、『筆海』十巻がある。この中で、『初学記』を除いた他は、今はもう存在しない。この中に『文館詞林』のような、分類的な総集があるかどうか、我々には分からない。しかし『文館詞林』の性格は、『北堂書鈔』からは隔たっているけれども、『藝文類聚』とはむしろいくらか近い。欧陽詢は『藝文類聚』の序で、「流別・文選⁽³⁾の専ら其の文を取り、皇覽・遍略⁽⁴⁾の直だ其の事を書す」方法を妥当でないとして嫌い、彼ら（『藝文類聚』の編者は彼一人ではない）は「事 其の前に居り、文 後ろに列す」というスタイルを採用したと言う。このことは、『藝文類聚』が総集（『流別』・『文選』）と類書（『皇覽』・『遍略』）の性格を兼ね持っていることを現わしている。と同時にまた、彼らの総集を取り扱う態度と、類書を

取り扱う態度とが、ほぼ同じであったことをも現わしている。『文館詞林』は流別・文選と同種類の書物であるが、彼らにとつては当然皇覧・遍略と変わらないものであったのだ。もう一步退いて言えば、『文館詞林』の性格は『藝文類聚』と半ば同じであり、後者が類書である以上、前者も少なくとも半分は類書の資格を持っていることになる。

ここでは唐初の文学の特徴を最も端的にあらわすものとして類書を取り上げる。類書は文学と学術の間に介在し、その二者を兼ね備えた混合物であること、その文学と学術の融合というあり方こそ、唐初の文藝の最大の特徴であると聞一多は言う。

後に類書と呼ばれる『北堂書鈔』『藝文類聚』を始とする百科全書的な一群の書物が、本来はその当時の権力者の世界観を反映した、支配体制の誇示を目的とするものであったことは既に説かれている⁽⁵⁾。また、類書という呼称やその応用の仕方が、編纂時と後世とは微妙に異なることも知られる⁽⁶⁾。しかし聞一多はここで、編纂の当時において、初唐の文人たちが類書に向かった態度と、総集編纂に向かったそれとが同質のものであったことを『藝文類聚』の序文から考察する。

歐陽詢『藝文類聚』序文に言う。

流別文選專取其文、皇覽徧略直書其事、文義既殊、尋檢難一、爰詔撰其事、且文棄其浮雜、刪其冗長、金箱玉印、比類相從、号曰藝文類聚。凡一百卷、其有事出於文者、便不破之為事、故事居其前、文列于後、俾夫覽者易為功、作者資其用、可以折衷今古、憲章墳典。

「流別・文選」は晋の摯虞撰『文章流別集』と梁の昭明太子撰『文選』、ともに六朝を代表する詩文総集である。「皇覽・編略」は『皇覽』と『華林編略』。『皇覽』は魏の文帝の勅撰であり、類書の始めとされる。『華林編略』は梁の武帝勅撰の類書であり六百卷あったと言われる。ともに大部の典籍の集大成的書物である。欧陽詢が「流別・文選の専ら其の文を取り、皇覽・編略の直だ其の事を書す」という通り、前者は「文」すなわち文学作品の総集であり、後者は「事」すなわち事象・事類を総覧する性格のものである。その「文」と「事」とを統合して成った『藝文類聚』は、一方で『文選』や『文章流別集』のような詩文総集的性格を持ち、他方でまた事項を類次的に並べていく百科全書的性格を持つ、いわば文学と学術との混合物であったことを聞一多はここで指摘するのである。それは「彼らの総集を取り扱う態度と、類書を取り扱う態度とが、ほぼ同じであったこと」を表すと同時に、いわゆる「文学」なるものの認識が、時代によって大きくぶれるものであることを示している。その文学意識、特に六朝末期に至ってその洗練度を高めた文学意識は、唐初においてある退化現象を興す。それを次に聞一多は、太宗とその文学観を廻って鮮明に描いていく。

四 太宗と文学の実用化

上に挙げた書名は、新旧唐書と唐会要などの書物の中から適当に摘み出して来たものに過ぎない。もしかしたらまだ遺漏があるかもしれない。しかしここに並べたものを見るだけでも、人を驚かすのに十分である。特に官修のものが大多数を占めていることは、実に不可解である。もしもそれらが『通典』のような、あるいは『大英

『百科全書』のような性質のものであったなら、我々はそれらの数が少なすぎることを訝しく思うだろう。しかしそれらは「免園冊子」⁽⁷⁾、どんなに大きく見積もっても、規模が割に大きく、質が割に高い「免園冊子」の後身に過ぎないのである。一国の政府が忙しいなか多くの第一流の人材を引き抜いてまで、かくも多くの「免園冊子」(太宗の時、房玄齡・魏徵・岑文・許敬宗らがこの種の作業に参与した)を編纂したということは、現代人の目から見れば滑稽ではないだろうか。いやしかしそうではないのだ。これこそが唐太宗の提唱した文学の方法であり、彼のいわゆる文学がこのような方法で打ち出されたのは、とても正しかったのである。「沈思翰藻」⁽⁸⁾を文学だとする主張は、すでに久しい。加えて六朝以来文学嗜好を有する帝王は特に多かった。文学は帝王たちの身分と相応することを求められた。沈思翰藻の主義が彼らの条件に最も適合すると考えられたのも自然であった。太宗によって提唱された文学は、更にこの路線を外れるわけにはいかなかった。もともとこの種のもつばら表現上の美しさへのみ才能を誇示する作風は、インスピレーションよりも学力を必要とする機会が多い。このことは既に文学の実用化であったと言える。南朝の文学が既に実用化の過程にあった以上、隋の統一後、さらに北方の極端に実用的な学術と正面から接触し、ここに「水流湿、火就燥(水は湿った方に流れ、火は乾燥した方に就く)」⁽⁹⁾という物理的原则に照らして、既に実用化された文学が更に実用化の度合いを深めぬわけにはいかなくなり、唐初に至り、更に太宗の奨励を経て、ついに学術と同化してしまったのだ。

唐初、特に太宗の時代に大部の類書、それも官修の類書が多量に編集されたことについて、聞一多はそれを文学の実用化の表れだという。つまり、六朝の帝王の愛した「沈思翰藻」なる「文学」を、太宗は帝王として自分のものにしたと考えた。南朝末の美しさの追求に偏重した作風と、北朝の実用的な学術とは、ともに詩的靈感よりも学力を

重視とするという意味において共通し、結果文学は実用化の度合いを高め、ついに學術と同化してしまうというのである。

興味深いのは、ここで聞一多が言う「文学の実用化」という表現である。実用化と言う以上、明らかにそこには本来文学は実用的なものではなく、内在的価値を持つものだという認識がある。しかしそもそも中国において文学、なにかんづく詩は現実とのかかわり、社会への有効性が強く求められてきた。それは漢代的儒家的文学観に基づくものであるが、中国古典を対称にして詩や文学を規定する際に、それを無視して語ることの出来ない絶対的な前提であることは間違いない。しかしここで敢えて聞一多がそれを排除した背景には、聞一多自身の中国文学史観、特に建安文学に対する独自の視点があるものと考えられる。それは即ち、建安において詩は、己の感慨を歌うものとしての抒情性を獲得し、文学はその他の価値から独立するという認識である。六朝期は確かに文学が独自の価値を獲得していく時代である。曹丕の典論論文に始まり昭明太子の文選序文に至るまでの、その成熟した文論を見るだけでも、そこに明らかに文学作品に対する絶対的な価値への認識が認められる。聞一多は六朝期の文学については多くの言及を残してはいないが、しかしこの初唐文学論の背景には、六朝期に文学が独立した価値を勝ち得たという認識があることは確かなのである。

六朝期に一気に高められた文学の価値は、唐初において退化する。その原因を聞一多は太宗の文学の実用化、つまり文学の學術化に見るのである。

五 文学と學術の同化

文学が學術と同化した結果は、三つの方面から説明できる。第一として、章句の研究⁽¹⁰⁾がある。李善を代表とすることができ、二つ目として、類書の編纂がある。博学と称され、『兔園冊子』と『北堂書鈔』の編者である虞世南を代表とすることができる。第三番目は、文学自体の言葉の累積性⁽¹¹⁾である。これについてはその代表を示すのが難しい。なぜなら当時の一般的な文学者の程度はどれも同じようなレベルであり、跳び抜けた一人の特別な存在を選び得ないからである。仕方が無いので唐の太宗を挙げておくしかない。太宗が言葉の累積性において人より優れていたというわけではない。また彼の言葉の累積性の程度が人より甚だしかったというわけではない。ただ、帝王という地位により、彼の影響は一般人と比べ物にならなかったはずであるし、そのうえ彼はまた、とてもはつきりとこの種の文体に対して注目を示していた(その証拠については後ほどすぐに提出したい)。

まずは、章句の研究、類書の編輯、そして文学自体の言葉の累積性という三つの面の関係について述べてみたい。

李善の綽名は「書籬」「書物箱」⁽¹²⁾であった。なぜなら歴史書によると彼は「古今を淹貫するも辞を蜀^{ツク}る能はざる」(大変な博識ではあるが文章をうまく書くことができない)⁽¹³⁾「人であったからだ。歴史書はまた、彼が始めて文選に注をつけたとき、「事を釈して意を忘る」「事項の解釈ばかりで意味内容へふみこまない」⁽¹⁴⁾であったため、息子の李邕がそれを補って初めて「事に附して義を見わす」「事柄についての説明を加えることで意味を浮かび上がらせる」⁽¹⁵⁾「のレベルまで到ったとも言つ。李善のこのような「事」ばかりを重視し、「意」を軽んじる態度は、実は類書家と同じものである。章句家は「書籬」であり、類書家もまた「書籬」である。章句家は「事を釈して意を忘れ」、類書家は「事を採りて意を忘る」のである。私のこの指摘は決して言い過ぎではない。『郡

『書治要』をとりあげて『北堂書鈔』あるいは『藝文類聚』と比べてみるだけでも、すぐにそれは分かる。同じく書物からの抜き書きであり、同じく一時代の産物であるのだが、しかしそれらを『郡書治要』の「主意」の質と比べてみると、『北堂書鈔』『藝文類聚』の「主事」の質がとりわけ鮮明に明らかになる。章句家と類書家の態度は根本的に同じなのである。しかし創作に携わる人間はどのようにしてその二つでありえるのだろうか。もしも五種類の書物を選び出し、それらを次のような順番で並べてみたならば、

『文選注』 『北堂書鈔』 『藝文類聚』 『初学記』 初唐詩人の詩集

我々は一つの初唐の詩の、構成順序の中での数個の段階を見ることが出来る。その初めは「書籠」であり、最後は唐初五十年間に生まれた一首の詩であり、その間にあるのが、比較的散漫で比較的細々とした「事」が段々と整然とし分化していく過程である。五種類の書物はともに「事」を徵集し並べたものである。どれもある種機械的な作業である。作業が精巧か粗雑かという程度の差があるのみであり、性格的な大差はない。この中で、『初学記』は開元年間の産物ではあるが、しかし実は比較的早いある時期の態度を代表することができる。我々の討論の範囲の内で、この書物の体裁は、もつとも興味深い。どの項目の題目の下にも、まず「叙事」があり、その次に「事対」がある。そして最後に詩・賦あるいは文がまる一篇引かれている。実はこの三項の中で、「事対」を除き去ると、それは『藝文類聚』と同じになり、更に詩賦を除き去ると、『北堂書鈔』と同じになる。だから、我々は『北堂書鈔』から『初学記』までを見ていくことによって、類書の進化史を眺めることができる。そしてこの類書の進化史の中に、初唐詩の構成過程もまた完全に顕われ出ているのである。そう、一首の詩が「事対」の程度まで出来上がったとすれば、それはすでに半分成功したようなものではないだろうか。残りの仕事は、「事対」を五字で一幅の更に完全な対聯に装飾し、韻脚をつなぎ合わせ、そして頭と尻尾を取り付けさえすればよい

のである。(五言律詩は当時最も流行したスタイルである。しかしここでは、平仄を整えることを勘定にいれていない。なぜなら当時の詩は平仄をほとんど整えてはいなかったからである。)このように見えてみると、唐初五十年間の類書は比較的粗雑な詩であり、また彼らの詩は比較的精密な類書であったと言ったとしても、あながち間違いではあるまい。

『文選』に、典拠を中心とした詳細な注を施した李善は、「書籠」つまり書物箱とあだ名された。それは、知識の量は膨大だが自ら詩文を創作する才能に乏しかったという意味である。この李善に代表される章句家、つまり注釈家と、同じく事例の採取を目的とする類書家とは、ともに文学作品の「意」すなわち意味内容よりも、「事」すなわち事例の詳細ばかりを重視するものであって、「創作に携わる人間」とは相容れない立場のものである。

さらに聞一多は李善の文選注と『北堂書鈔』『藝文類聚』という類書の類似性に着目し、類書の中でも『初学記』における事対の特徴から、それがそのまま初唐詩人の詩に繋がって行くことを説明する。つまりここでは唐初の類書が「事」を中心とした知識の集積として存在し、その中に表れた「事対」の発展形が初唐の詩なのだというのである。

注釈から類書、類書から対聯、そして詩へという発展の形の中には、確かに文学と学術とが未分化のままに混在している。しかし事対から発展した対聯は、どんなにその技巧が巧みになろうとも、それだけでは詩、少なくとも良い詩にはならない。「唐初五十年間の類書は比較的粗雑な詩であり、また彼らの詩は比較的精密な類書であった」というのは、ある意味初唐詩の全否定でもあるのである。では、詩とは何なのか。良い詩とはどのようなものなのか。詩が言語の集積のみで出来るものではないことの意味について、論は更に続く。

六 初唐詩の不毛——太宗——

『旧唐書』文苑伝の中に収められる作家には、多くの詩人がいるけれども、しかし崔信明の一句「楓落吳江冷
 「楓落ち吳江冷やかに」⁽¹⁶⁾」が類書の範圍には収まらないのを除いて、その他の作家の作品は形を変えた類書だ
 と言ってしまうことはできないだろうか。唐の太宗が隋の煬帝に及ばないのは、「飲馬長城廬行」のような作品
 を作らなかつたことのみにあるのではない。かの「南朝化」した煬帝と、「南朝化」した唐の太宗とを比較して
 みると、前者の

暮江平不動

暮れの江は平らかにして動かず

春花滿正開

春花満ちて正に開く

流波將月去

流れる波は月をして去らしめ

潮水滯星來⁽¹⁷⁾

潮水は星を帯びて来る

や、さらに

鳥撃初移樹

鳥 撃たれて初めて樹を移すも

魚寒不隱苔^① (自注)

魚 寒けれど苔に隠れず

のような表現が、後者に見られることは無かった。それだけではない。煬帝は「空梁落燕泥〔空の梁に燕泥落ち・燕が飛び去り空になった巢のある梁から、主のいない巢の泥が落ちてきた〕と「庭草無人随意緑〔庭草無人 随意の緑・春になり誰もいない庭にも草は緑の新芽を存分に萌えさせている〕」の二句の詩を嫉妬したために二つの命を謀殺したことがあったとも言う。⁽¹⁸⁾「楓落吳江冷」は、この二つの名句と比べてどうであろうか。崔明信が天寿を全うしえたのは、太宗の度量が煬帝より大きかったからなのか、それとも彼の眼力が煬帝より低かったからなのかは分からない。これは笑い話ではない。もしもこの問題に答えることができれば、太宗統治下の作品の質の程度は判断できるのである。実際のところ、崔明信というこの人を、おそらく太宗はまったく知らなかったのである。だから、彼はほんとうはその度量と見識を憶測するような機会を我々に残してはいなかったのだ。しかしこのことは、太宗の良い詩に対する見識がとてもお粗末であったことを更に十分に証明している。もしも彼が見識眼をもっていたならば、おそらく当時詩壇の舞台を支えていたのは、崔信明・王績そして王梵志であり、虞世南・李百薬などといった人々ではなかったはずである。

ここではまず初唐詩の不毛の要因を太宗の文学鑑賞眼に帰す。ともに南朝への憧憬を抱いて文学を重視した隋の煬帝と唐の太宗とは、自らの詩作においても、また他人の詩の鑑識眼においても、大きな懸隔があった。煬帝は斬新で美しい詩(楽府)をものしたのみならず、佳句への嫉妬のために人の命を奪うほど文学に対する思い入れが強かった。一方太宗は「良い詩に対する見識眼がとてもお粗末」であったため、優れた詩人が詩壇の中心に位置することなく、いたずらに類書まがいの詩ばかりが詩壇を支えていたという。

聞一多がここで唐初の詩人として重視するのは、まず崔信明であり、そして王績・王梵志である。なかでも崔信明

への評価はとりわけ高い。しかし引用の一句「楓落吳江冷」は、現在では『旧唐書』の文苑伝の中に僅かに物語の一部として引かれるのみであり、まとまった詩文集にも引かれていないうえ、その物語も決して崔信明に好意的ではない。何故そのような詩人をここに強調したのかはよく分からないが、おそらく南朝貴族風の洗練された詩表現を代表する詩人として唐初の代表としたのではないかと思われる。

ともあれ、従来貞観の治をもたらした英主とされる太宗に対して、その文化事業への評価はさて置き、文学性の欠如、とりわけ詩の鑑識眼の欠乏を、唐初文壇の不毛の最大の原因とする視点は鋭い。そこにはやはり、良い詩とは何かという詩の本質に対する熱い問いかけが内包されているのである。

七 初唐詩の不毛——事と意と詩の“真諦”——

さてそこで、我々は前に引いた、当時の人が李善を「事を釈して意を忘る」と批判したこと、そして我々が類書家を「事を採りて意を忘る」だと批判したこの二つの言葉を思い返す必要があるかもしれない。いまここで、私がそれらの作家に更に「事を用いて意を忘る」という案語を加えたとしても、読者は必ずしも言い過ぎだとは思わないだろうと考える。虞世南と李百薬とを崔信明・王積・王梵志と比べてみると、それは実に「事」と「意」の対比だとは言えまいか。我々はそこで、魏徴の「述懐」がこの時期の優れた詩であると認識されていることに思い至る。「述懐」が唐代開国時の詩の中で占めた地位は、魏徴本人のその時の政治上の地位と同じくらい優れていたと言う。この考え方には少し可笑しいところがある。というより、唐詩に関しては、もとよりこのような考え方を生む余地があることこそが、大変憐れむべきことなのである。冷静に見てみれば、「述懐」は平凡な詩

である。ただこの作者が一般の作者のように、かの「詩言志」という古訓をまだ忘れてはいなかったからこそ、結果的に平凡であるが、やはり「詩」だということを失ってはいなかったのだ。選定家たちが魏徴を探し出してきて初唐詩を代表させたのは、その時代の貧困を十分に表している。太宗と虞世南・李百薬、及び当時群を成した文官たちが、数十年間にわたって詩を作ったのだけでも、結局この詩壇の外の世界の人である魏徴によってしか、比較的醒めた詩の意識を維持できなかったということは、彼らの恥辱としか言いようがない。

たとえ太宗と彼に率いられた人々が詩作に大変熱中していたとしても、結局のところ彼らが熱中していたのは詩であるというよりは学術であったのだ。修辞立誠の四字⁽¹⁹⁾に関しては、彼らは「修辞」にまでは達していたけれども（これについては尚疑問ではあるが）、かの「立誠」の觀念については、彼らの詩の中には、まるまる存在しなかったと言う事ができる。唐初の人の詩は、詩の真諦（真の意味）からはかくも隔たっていたのだ。だから、もしも唐初という時期は詩表現の大規模な収集の時期だということができるとするならば、この詩表現の収集は、実は類書の纂輯のみを指すのではなく、詩の制作もまたその範囲内に属するものとしてあったのだ。

このような状況は、もちろん太宗がその大部分の責任を負わなければならない。前文で、太宗が言葉の積み重ね式の文体に注目していたことを指摘した。そう、彼が自ら撰した『晋書』陸機伝論⁽²⁰⁾を見ればそれは分かる。

観夫陸機陸雲、実荆衡之杞梓、挺珪璋於秀実、馳英華於早年。風鑑澄爽、神情俊邁。文藻宏麗、独步当时、言論慷慨、冠乎終古。高詞迴映、如朗月之懸光、量意迴舒、若重巖之積秀、千条析理、則電拆霜開、一緒連文、則珠流璧合。其詞則深而雅、其義則博而顯。故足遠超枚馬、高躡王劉、百代文宗、一人而已。

〔夫の陸機陸雲を観るに、実に荆衡の杞梓にして、珪璋を秀実に挺げ、英華を早年に馳す。風鑑澄爽、神情

俊邁。文藻の宏麗なること、当時に独歩し、言論の慷慨すること、終古に冠たり。高詞は迴映にして、朗月の光を懸けるが如く、晝意は迴舒にして、重巖の秀を積むが若し。千条理を析くれば、則ち電のごとく折き霜のごとく開け、一緒文を連ぬれば、則ち珠のごとく流れ壁のごとく合す。其の詞は則ち深くして雅、其の義は則ち博くして顯。故に遠く枚馬を超え、高く王劉を躡むに足る。百代の文宗、この一人のみ。」

彼の崇拜した陸機は、「文藻宏麗〔文章表現がダイナミックで壮麗〕」な、そして「晝意は迴舒にして重巖の秀を積むが若き〔大きな巖を幾重にも高く積み上げたかのような重層的な表現をもつ〕」陸機であった。だから太宗は彼の群臣の中でも虞世南を最も尊敬したのである。褚亮は「十八学士讚」⁽²¹⁾の中で虞世南をこのように讃えている。

篤行声を揚げ、雕文絶世、百家を網羅し、六芸を並包す

〔篤行では名声を揚げ、文章表現は世に優れ、百家の思想書を網羅し、六芸をすべて修得している〕

両『唐書』虞世南伝⁽²²⁾ではともに、彼が兄の世基と一緒に長安にやってきた時、時の人々は晋の二陸〔陸機・陸雲〕になぞらえたという。『新唐書』の伝ではまた、この二人の兄弟を品定めして、

世基は辞章清勁なること世南に過ぐるも、瞻博なること及ばざるなり。⁽²³⁾

〔世基はその表現力が美しく力強いことにおいては弟の世南より優れていたが、知識の広さでは弟に及ばな

かった」

と言う。このような虞世南であったからこそ、太宗が「我と猶お一体のごとし」と考え、虞世南の死後には、「鍾子期死して伯牙復た琴を鼓せず」⁽²⁵⁾の嘆きまでであったことも頷けるのである。この虞世南こそ「兔園冊子」と『北堂書鈔』の著者であったことを我々は記憶しておかなくてはならない。この点はきわめて重要である。このことは、太宗が鼓舞奨励した詩が「類書家」の詩であったことのみならず、それが「類書式」の詩であったことを我々にはつきりと示しているのである。つまり、太宗は畢竟实用性を重んじた周旋人であった。詩の真諦については、彼は深く悟ることはなかったし、おそらく悟ることはできなかったであろう。彼の詩に対する理解は、結局のところ実用的な人間の理解であった。彼が追求したものは文学的表現、虚飾に過ぎなかった。いやそれは、文学表現上の浮腫であり、文学の皮膚病であった。このような病状は、上官儀の「六对」「八对」にまでくると最悪の極地に到り、詩の生命さえも脅かしそうになる可能性を持った。かくて、この危険な現状を察知し、激しく憤った青年「四傑」が、声を大にし、争って病状に針を刺そうとせずにはおれないことになったのであった。

自注

①『隋遺録』に載せる「煬帝」の諸詩は皆明らかに優れ朗誦に値するが、唐人の偽托に係る。「鉄圀山叢話」に引く佚句「寒鴉飛数点、流水遶孤村」もまた偽作である。

魏徴の「述懐」は、『唐詩選』の冒頭を飾る初唐詩の代表とされる一首である。六朝的な華麗な修辭を廃し、感慨を誠実に詠ったこの一首を、聞一多は「平凡な詩」だという。しかし平凡ではあるが「詩の意識」、即ちそれは「詩言志」の伝統であり聞一多の言うところの「意」であるのだけでも、それを持つていたがゆえに、文壇の中心に位置した多くの詩人を押さえて初唐詩の代表とされるのだ。魏徴詩のこのような位置づけはまた反対に、初唐の文壇を支えた詩人たちが、「事を用いること」つまり解釈や類書の編纂に代表される学術の分野にばかり熱中し、「詩の真諦」から遠く隔たっていたことをも表している。

聞一多がここで言う「詩の真諦」とは、「事」でも「意」でもない、詩を詩たらしめる詩精神のようなものである。それは詩を解釈することからも、詩表現を収集することからも生まれ得ない、詩の持つ本来の意味を言うものだと云つてもよい。

「唐初という時期は詩表現の大規模な収集の時期」であつたと聞一多は言う。それは類書の編纂のみならず、詩の創作においてもそうであつたと。そしてその状況の原因を太宗の文学に対する姿勢の中に求める。文学が学術と同化した結果として前にその三つを挙げている。一つは章句の研究、二つ目は類書の編纂、そしていま一つは文学自体の言葉の累積性、つまり重層的に言葉を積み重ねていく文体の特性である。この三つ目の、言葉の積み重ね式文体について、六朝の陸機の文章の「文藻宏麗」「量意迴舒」たる特徴を、太宗自身がその重層的文体で以つて伝論したのみならず、その陸機になぞらえられた虞世南を、知識の広範さと重層的表現の特性ゆえに特別に重視したことでもつて、太宗こそが唐初の詩の不毛の一因となつたことを指摘する。太宗が鼓舞奨励した詩が類書家の詩であり、かつ類書式の詩であつたこと、それは既に詩ではなく、「文学的表现」であり「虚飾」に過ぎないこと、そしてこのような内容と精神の無い虚飾に塗り固められた詩の瀕死状態をもたらしたのが、唐初、特に太宗の文学理解であつたことを、痛

烈に批判するのである。

最後は、このような文学の瀕死状態、病巢の悪化にメスを入れ、詩に新しい命を吹き込むことになる四傑の登場を示唆してこの「類書と詩」は結ばれる。

八 詩と学術

「類書と詩」と題されたこの論考は、聞一多の他の詩人論・文学論に較べて雑駁でありまとまりに欠ける。おそらく『少陵先生年譜会箋』と同時期に、その作業の中から生まれたものではないかと推測されるこの論考は、十分な推敲と思索を経ないまま忽卒と、そして筆に任せて書かれたものに違いない。しかしその忽卒さとまとまりの無さは、反対に聞一多の横溢する文学意識を雄弁に物語るものでもある。事実を説明しようとしつつ、その具体的な挙例の一つ一つに果てしなく広がっている文学論、それは教科書通りの枠組みに収まらない文学と文学史への新しい切り口を多く示して貴重である。

この論考の最大の特徴は、文学史の中に「学術」という視点を持ち込んだことである。そもそも唐初の五十年間は学術の時代であり、文学的には不毛であった、というのがこの論考の趣旨であり結論である。もちろん「文学」も「学術」も近代を生きる我々の概念であり、唐初を生きた文人たちは、そのような言葉でもって自らの文化を認識していたわけではない。しかし、文学史という大きな流の中でこの時代の文化を捉える時、この「学術」という視点がその特徴を浮かび上がらせるのにとっても有効であることを我々は知らされるのである。初唐五十年の文学の特性を聞一多は以下のように纏める。

通常我々は六朝というとき、その文学にばかり気を配り、その時期が学術に対して更に濃厚な興味を持ったことを知らない。唐の初めの五十年が六朝に似ているのも、まさにこの一点においてである。この時期がもしも文学史上に何かの位置を占めるとすれば、それはその文学そのものにどれほどの価値があったかに拠るのではなく、それが文学の研究において特に熱心であったことに拠る。一方で、文学を学術として研究したと同時に、またある意味、文学に偏向した観点でその他の学術を研究したのである。

そして李善の文選学と歴史書編纂を例として挙げる。ここには文学と学術、そして歴史学とが、それぞれ独立したものであるのではなく、曖昧な境界に揺らぎつつ存在するものとしてあったことが示される。そして、文学と学術とが無自覚のまま融合した類書なる存在こそが、最もこの時代を代表する文学の形であったことが説明される。このように、学術という視点を持ち込むことによって、唐初五十年の文学が、文学の研究に熱心な、しかし非常に文学性に欠けた時代であったことが鮮明になるのである。

また、この論考のもう一つの重要な視点として、北朝文人の「南朝化」というものがある。北朝の流れを受けた隋唐王朝の帝王たちは、いずれもみな南朝文化を取り込むことで帝王としての権威を示そうとした。隋の煬帝はかなり繊細で感性的な詩文をものする才能を有していたが、唐の太宗は六朝風に洗練された文学の才能に乏しかった。そこで太宗は文学の創作ではなく、文学を対象とする大規模な文化事業を展開した。それが歴史書の編集であり類書の編纂であった。太宗には他に五経正義の撰定という国家的大事業がある。これらがすべて帝王としての権威付けであったり、新しい秩序体系の誇示であったりしたことは十分に考えられるが、しかし文学という視点からこれら太宗の文

化事業を見る時、そこに大きな文学性の欠如、詩の不毛があるということこそがこの論考の要点なのである。

従来唐初の文学は、六朝風の過度に華麗な文辞を脱し、新しい階層による気骨ある風格を取り戻した時代だとされる。しかし六朝期の、特に南朝の文学は、その洗練された文学意識とともに、新しい時代にあっても揺ぎ無い尊崇を持ち続けていた。それは詩や創作に対する純度の高い文学意識がそこにあつたからであり、またその文学意識は王朝の交代や支配者層の変化に即応して移り変わるようなものではなかつたからである。南朝文化を貴族・華美という表層のみで捉え、それを唐王朝の士大夫層の質朴さと対比させ、いたずらに六朝的要素を排除するところに新しい文学的価値を読み取ろうとする文学史観からは、このような視点は生まれ得ない。「南朝化」に成功した煬帝の詩に文学性を見、それに失敗した太宗に文学性の欠如を見る聞一多のこの視点は、詩や文学の中に自らの生成発展律を見出すとする新しい文学史観であり、聞一多の文学史研究の優れた特徴だといふことが出来る。

このように見えてくると、「類書と詩」というこの論考のタイトルは、言いかえると「学術と文学」あるいは「言葉の累積と詩的言語」とも言える詩人聞一多の詩歌至上主義を表しているとも言えよう。それは、どれほど研究を深めようとも、どれほど膨大な資料を集めようとも、言葉と言葉を積み重ねるだけの機械的作業と詩の本来の意味とは同一のものではありえない、という主張なのである。「詩の真諦」の一語こそ文学と学術、詩と類書とを分ける境界であり、それを持つものだけが本物の詩なのだといふ聞一多の詩歌観がここからうかがえるのである。

唐初の五十年には詩的言語の累積はあつたが詩はほとんど無かつた、と聞一多は言う。そしてその文学不毛を打開し、新しい詩の世界を切り開いたのは、南朝的な文学の流れを自らの内に潜在的に持ちながらも、意識的にそれを破壊し、破壊者の運命を自ら荷なつた四傑、なかでも盧照鄰・駱賓王の二人であつたことを示唆しつつこの論は収束する。果たして次に展開される聞一多の初唐文学論は「四傑」と題される。それは詩人の使命を中心に据え、また詩の

真諦を迫及した、新しい詩人による文学史なのであった。

注

- (1) 聞一多の杜甫研究の中でも「杜甫」と『少陵先生年譜会箋』の持つ意味については、松原朗「聞一多『少陵先生年譜会箋』について」（日本聞一多学会報『神話と詩』創刊号二〇〇二年）に詳しい。
- (2) 『新唐書』巻二〇一 文藝伝序に、「高祖太宗、大難始めて夷ぐに、江左の餘風に沿い、絢句繪章、揣合低印す」とあり、六朝的な詩風を言う。
- (3) 晋の摯虞撰『文章流別集』。建安以後の詩賦の文集。
- (4) 『華林編略』。『旧唐書』経籍志に「華林編略 六百卷 徐勉撰」、『新唐書』藝文志に「徐勉華林遍略六百卷」と。
- (5) 津田資久「漢魏交代期における『皇覽』の編纂」（『東方学』第百八輯、平成六年）では、漢魏という王朝交代期に編纂された『皇覽』を、王朝の正統性を示す歴史認識の必要から生まれた類書体の史書であったとする。
- (6) 大淵貴之「唐創業期の「類書」観念——『藝文類聚』と『群書治要』を手がかりとして——」（『中国文学論集』第三十五号、二〇〇六年）では、類書における詩文作成のための工具書としての機能や特徴は実際的には副次的なものであり、政治の参考に資する目的で集成された雑家書としての在り方そのものが、第一に想定すべき唐初の「類書」概念である、とする。また、加藤聰「類書『初学記』の編纂——その太宗御製偏重をてがかりとして——」（『東方学』第百十一輯、平成十八年）は、『初学記』の中に太宗の詩文が際立った重視を受けている事実をもとに、『初学記』編纂の意図が、同時期に編纂され「吏」の立場から太宗の治世を称揚した『貞観政要』に対抗した、編者張説の「吏」道に対する「文」の宣揚であったことを考察する。
- (7) 兔園冊子は、一般レベルの教科書的な書物を用いる言葉であるが、虞世南には『兔園冊』十巻の書があったと言われる（郡齋読書志）。『困学紀聞』によれば、唐の太宗の息子である蒋王暉が科挙に倣って自ら問対を設定したもので、梁の孝王の兔園にならって書名としたという。
- (8) 『文選』序に「事は沈思より出で、義は翰藻に帰す」と。深い思想と美しい表現を言う。

- (9) 『易』乾卦文言伝の言葉。
- (10) 章句とは、もともと文章を訓点で区切る作業をいうものであるが、『楚辞章句』などの例からも分かるように、注釈書の類を言うものとなる。ここでいう章句の研究は、注釈作業の意味で使われている。
- (11) 原文は「文学本体的堆砌性」。堆砌とは積み上げること。美辞麗句を重ね的に積み上げる文体を言う。ここでは「言葉の累積性」と訳しておく。
- (12) 『新唐書』卷二百一 文藝伝(中) 李邕の項。
- (13) 注(12)に同じ。
- (14) 注(12)に同じ。
- (15) 注(12)に同じ。
- (16) この一句は『旧唐書』卷二百九十 文苑伝上 鄭世翼伝に引かれる。「時に崔信明、自ら謂へらく、文章独歩し、凌轢するところ多しと。世翼 諸に江中にて遇えり。之に謂ひて曰く『嘗て「楓落吳江冷」を聞く』と。信明欣然として百余篇を示す。世翼之を覽て未だ終えずして曰く「見る所 聞く所に如かず」と。之を江に投ず。信明対うるあたはずして、楫を擁きて去る。」
- (17) 隋煬帝「春江花月夜」『樂府詩集』卷四七 清商曲辭に引く。
- (18) 「空梁落燕泥」句は薛道衡「昔昔鹽」(『樂府詩集』卷七九)。「庭草無人随意緑」句は王胄。この話は『資治通鑑』卷一八二 隋紀六 煬皇帝中に見えるもの。他に『漁隱叢話』(前集卷二二二)、『詩話總龜』(卷三二 詩畧門)、『容齋隨筆』(続筆卷七 昔昔鹽)にも引かれる。
- (19) 『易』乾卦文言に「修辭立其誠、所以居業也」とあり、言語文章をおさめ飾ることで誠意を立てること。つまり表現(修辭)と内容(立誠)の双方が充実していることをいうものと解釈する。
- (20) 『晋書』卷五四 陸雲伝。「其詞則深而雅、其義則博而顯」を『晋書』では「其詞深而雅、其義博而顯」に作る。
- (21) 褚亮の「十八学士讚」は『玉海』卷五七(四庫全書・子部・類書類)に見られる。「百家」を『玉海』では「百氏」に作る。
- (22) 『旧唐書』卷七二 及び『新唐書』卷一百二。
- (23) 『新唐書』卷一百二 虞世南伝。
- (24) 『旧唐書』卷七二 虞世南伝に「虞世南於我、猶一体也」と。

(25)

注
(23)
に
同
じ。

